

平成 25 年度後期 大学院授業評価に対する教員からのコメント

平成 26 年 5 月 7 日
研究科委員会

平成 25 年度後期終了時に実施した「大学院生による授業評価」の回収率は 57.1%でした。ご協力くださった皆様、ありがとうございました。大学院生から寄せられた意見の要約と、それに対する教員の回答を枠内に示しています。今後も、院生と教員双方の努力によって学習・教育の質向上を図りたいと考えます。

1. 大学院生自身の取り組みに関する事項

種々の主体的学習活動を通して意欲が増したという実感が述べられている一方、その意欲を持続させることの難しさや意図した通りに学習や研究が進捗しないことへの悩みが記されていた。

「進歩の実感」と「苛立ち」は表裏をなすものだと考えられる。大学院生として学び始め学問の拡がりの地平が見えてくると、当初の計画の不備が目につき、より発展的な方向もほのかに見える一方、自らの力のなさや進歩の遅さに、とてもゴールには行きつかないと失望してしまうこともある。多くの大学院生がこうした経験を持っていると考えられるが、成長を遂げつつある証拠である。

主体性と自律性をもって学ぶのが大学院生としての「学ぶ姿勢」だが、実際には、自分自身に即したことへの直接的な答えを求めてしまう傾向がないとはいえない。自らが履修した各科目の学びの中から、何が使えるのか、何を調べよいかについて考えることも大切である。現に、特別研究などの主体的取り組みを通じて初めて実感できる学びもある。しかし、自分自身が足踏みをしていると思うときは、誰かに率直に話してみると自分の中に形成されつつある方向性に気付くこともよくあるので、実は同じように悩み続けている先達である教員に相談してほしい。

2. 授業内容・方法に関する事項

大学院で用いられる典型的な授業形態である「ディスカッション」における教員の役割、および、コース展開方法（特に、計画変更）について、戸惑いがあることが述べられていた。

大学院での学習活動は基本的に院生と教員の相互的働きかけによって形成されるもので、院生は、学習活動を構築するパートナーとして、内容や進行速度や計画提示などに関して疑問や不審や希望があれば、教員が「察知」するのを待つのではなく、自ら率直に表明してほしい。授業をよりよい方向に進めるためには院生も応分の責任を負っている。もちろん、院生の希望や提案を常にそのまま生かすことができるとは限らないが、院生側からの問題提起は必ずより生産的な学習活動を生み出すことにつながることを忘れないでほしい。院生のそうした積極的働きかけに対して教員がそれに倍する努力で報いなければならないことは言うまでもない。教員が、授業で取り扱う内容や進行速度や方法について、当初の計画を調整・変更する必要があると感じたときは、できるだけ速やかに院生に対して新しい計画を示し、院生の理解と同意を得るようにしたい。今回、院生の希望やレディネスによりよく対応しようという意図に基づいていたとしても、計画変更が必要になったと判断したとき、その意図や方法について院生の理解を得るための配慮や努力がやや不足していたことを率直に反省したい。

とくにゼミの日程調整については、今後も事前に院生と検討し、院生の学びやすいスケジュールとなるよう配慮したいと考える。

研究計画相談会については、その運営方法は院生が決めることになっている。前年度までの実施についての情報を集めるなどして、できるだけよい方法を考案してほしい。もちろん、計画の段階で教員の意見や助言が必要であれば、遠慮せずに相談してほしい。

3. 学習環境に関する事項

在職しながら就学している院生への配慮、特に、時間割変更が及ぼす影響についての配慮が不足していることを指摘する声があった。

在職しつつ就学している院生にとって、時間割変更が与える影響は大きいと思われる。この点は、苦労をかけてしまった院生の皆さんに心からお詫びしたい。本学では、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）に基づいて、急な時間割変更をしないことを原則としているが、次年度からは、この方針を一層徹底させたい。ただし、やむを得ない事情によって授業時間の変更が避けられない場合は、担当教員は「授業時間変更届」を事前に提出し、該当科目の受講者全員にとって出席可能な振替日を設定することとする。

授業評価アンケートは院生の学習環境を整えるためにも活用している。今後も要望等があれば、アンケートもしくは直接口頭にてお知らせ頂きたい。その都度対応していきたい。

4. 総合的な評価に関する事項

全般的に、授業や学習によって得たものがあることは実感しつつも、仕事との両立に悩み、研究の進捗状況には満足できないでいる院生が多いという印象を受けた。

不満や焦りの気持ちを持つこと自体が進歩の証でもあると思われる。研究計画の立案、研究実施、研究成果の記述（論文作成）は、どれも、一筋縄ではいかない作業である。通常の具体的な仕事や活動のように、原案を作ってやってみて、見直して手直しして、ほぼ完成、ということには、まずならない。研究は、急峻な山を登るときのスイッチバックのように、少し進めてはまた戻り、思案を重ねて修正し、また少し進めて…といったことを繰り返して、少しずつしか進まないものである。時には逆走しているような気がすることもある。論文作成も、経験を積んだ研究者であっても完成したと思ってから20回以上の見直しをし、それで投稿した原稿に対しても編集者からは注文が付く。研究には手間暇がかかる。そのかわり、一定の成果を達成したときには、他の何物にも比べられない充実感をもたらされる。このことを心に留めて、わかりやすい答えがどこかにはあるはずなのに見つからない、誰も教えてくれないと焦るのではなく、自分に対して寛容に、しかし懈怠の心に対しては厳しく、辛抱強く進んでいただきたい。そして援助が必要なときは、遠慮せずに教員研究室のドアをノックしてほしい。

時間の問題は在職しながら就学する院生にとっては常に課題であり、それは、ある意味どうすることもできない。だからこそ、これからは限られた時間を有効に用いること、いかに集中して質的に高めていく方法を見つけるかという発想の転換が求められてくる。今後の見通しを持ちながら、今なすべきことに計画的に取り組んでほしい。